

農経新聞

千葉県で生産拡大を

千葉市場で 加工業務用の生産期待も

青果育種研

青果卸会社と種苗会社「品種見本市」を開催し、で組織する青果育種研究会(会長＝宮本修・東京青果専務)は千葉市地方卸売市場で「第149回

農事は、同県の栽培条件を考慮して開発したタイコン「春わたり」を紹介。播種は11月上旬～1月下旬と長く、播種期が異なっても揃いが良いため、「播種期により品種を変えなくても良い」と同社。抜きやすく作業性にも優



みかど協和は「寒しらず」の歩留まりの高さをアピール

「黒皮の種なしスイカ「ブラックジャック」

来場者からの注目を集めた品種のひとつが、ナント種苗(奈良県橿原市)が開発した黒皮の種なしスイカ「ブラックジャック」。果重は6〜8kgとなり、コクのある甘さ。空洞になりにくくカット

ことを示し、他産地の扱いが増えてきていることを説明した。ただし、ニンジン、ダイコンなどの品目では生産量が減少しても東京市場での取扱いが1位となっており、「1位品目は商談会議にあまりやすく、(同産地の)他の品目も一緒に販売しやすい」とのメリットがあるという。しかし、これ以上減ってしまうと顧客も減ってしまう」と訴えた。今後は中食の需要が一層高まることをテーマで示し、業務加工用への取り組みの必要性を説いた。求められる品目はダイコン、ニンジン、ネギ、トマトなどと挙げ、「千葉県の特産品」と述べた。

れている。種子は千葉県限定で10月から本格販売する。また、加工用にも向いた品種としてみかど協和(千葉市緑区)ではタイコン「寒しらず」「作得」(つくりどく)を紹介。寒しらずは青首の色が薄く緑肉になりにくいため、加工歩留まりが高くなるという。極晩抽性の作得とともに根端までよく肥大し、肉がかためツマヤおでんピース加工にも適している。

千葉農業の生産振興で宮本会長が講演

見本市に先立つて行われたセミナーでは、宮本会長が同県農業の現状と生産振興、加工業務用への取り組みの必要性について講演した。同県においても生産者の高齢化の進展などから野菜全体の生産量が減少。同県産の東京都中央卸売市場での取扱量も20数年の間に減少している